

～りんご生産者の皆様へ～

腐らん病の伝染源を断ちましょう！

腐らん病の発生が目立っており、まん延すると大きな被害につながってしまいます。胴腐らん、枝腐らんの処理は徹底して行い、伝染源を断つことが重要です。

腐らん病の発生生態と近年の傾向

カビ（糸状菌）による病害で、3～5年枝や結果枝などに発生する枝腐らんと、主幹、主枝、垂主枝に発生する胴腐らんがあります。

◆感染部位は傷口

摘果や収穫時に発生する傷、せん定の切り口などが感染部位になります。

傷ができるせん定後、摘果後、収穫後が主な感染時期

= 「重点的な対策が必要な時期」

◆伝搬を担う胞子は、周年飛散しています。

◆経営面積の増加や生産者の高齢化により、近年は対策が徹底されていません。伝染性の病気なので、いったん増加傾向になると爆発的に増えてしまいます。対策を強化しないと、樹体が枯死し、果実生産ができなくなります。

今が手を打つべき時です！



胴腐らん(サメ肌状)



摘果あとから発生した枝腐らん(赤褐色部)

ポイント：伝染源の除去にあたって

1 園内の一斉点検

4月(展葉～開花期)は腐らん病が目立ち始める時期です。この時期に、地域で一斉点検を実施しましょう！

2 **せん除した枝、^{りびょうぶ}削り取った罹病部の処置【重要】**

絶対に園内に放置しないでください。粉碎しチップ化してもダメです。雨にあたるなど、水分があると胞子を形成して飛散させるため、焼却するか土中に埋めてください。



黄色い糸状の胞子を形成(5月)

対策：伝染源の除去

1 枝腐らんのせん除

枝腐らんは見つけ次第せん除しましょう！！

4月の展葉～開花期ころから見つけやすくなります。

病原菌は枝の表面よりも内部に広く存在するので、**健全な枝や葉そうを複数含めて長めにせん除してください。**



せん除の位置

対策：伝染源の除去のつづき

2 胴腐らの処置

病斑が主幹外周の半分以上に進展している場合は伐採を検討してください。
削り取る病斑の下にシートを敷き、削り取った病斑を回収できるようにしましょう。

◆処置方法

- 【手順1】病変部を確認したら、**腐らん病手術ナイフ**を使用して表皮を薄く剥ぎ、病変部の周囲を確認します。
- 【手順2】病変部に対し、ナイフを幹に向かって垂直に突き立て切れ込みを一周入れます。**この際、病斑周囲の健全部も含めることが重要で再発防止策になります（図1）。**切れ込みは滑らかに垂直に仕上げます。これにより癒合組織（カルス）の再生が速やかに進みます。
- 【手順3】切れ込みからナイフを樹皮と木質部の間に滑り込ませ、切れ込みに沿って病変部を剥ぎ取った後、露出した木質部の病変部をきれいに削り取ります。
- 【手順4】削り取った罹病部をすべて回収し、塗布剤を塗って終了です。

ポイント！
腐らんナイフは
垂直に使う

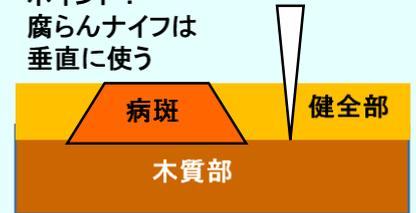


図1



手順1



手順2



手順3



病変部を削り取った状態



手順4



腐らん病削り取り動画

※再発した場合、上記の処置方法を繰り返します。



削り取り部から再発



再発部の除去後、輪郭部に残った病斑



病斑部が残っていないことを確認

処置があまいと再発します。定期的に再発の有無を確認し、確実に伝染源を断ちましょう！

腐らん病に特効薬はありません。地域一丸となった「伝染源の除去」が重要です。
潜伏期間が長いため、対策の効果を実感できるのは2～3年後です。
地域のりんごを守るため、根気強い「腐らん病対策」をお願いします。